The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	明治とデザイン : 小室信蔵 (1)
Author(s)	緒方, 康二
Citation	デザイン理論. 1980, 19, p. 2-25
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53652
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

明治とデザイン
—小室信蔵(1)—

緒方康二

(1)

日本近代デザイン史の展開をみるうえで，東京高等工業学校工業図案科の存在は特異である。工業図案科は，1897（明治30）年　3月,まず東京工業学校附属工業教員養成所内に設置され，次いで本科として置かれたのが1899（明治32）年9月であるが，デザイン関係の文書に断片的にみられる東京工業学校本科工業図案科に関する記述の多くが，その設置時期を1901（明治34）年としている。これは,東京工業学校が東京高等工業学校と改称された年(同じく1901〈明治34〉年）との混同によるものと思われる。

デザインを「工業」の場でとらえようとしたこの工業図案科の存在は，デザインが対象とした工業社会が未成熟の当時にあっては，時代に先んじたものであったといわねばならない。その試みは，わが国において機械化到達の度合が著しかった印刷部門とその関連分野において成果を挙げつつあった。ところが，中央直轄の教育機関に設置されたデザイン教育部門としては，東京美術学校に次ぐ（東京美術学校図案科は1896〈明治29〉年8月設置）ものでありながら，1914（大正3）年9月5日，文部省令第25号によって，明確な理由もないまま，突如廃止となる。工業図案科の存在が，東京高等工業学校の大学昇格に支障を

来すためとの説も流布され，あるいは，予算不足のためとのうわさもあったが，廃止の理由は明らかでない。廃止の決定は，関係教官・在学生・卒業生にとって突然のことであり，彼等の失望落胆は大きく，また再建にかける熱意も並々ならぬものがあった。結局工業図案科の伝統は，廃止決定7年後の1921（大正10）年に創設された，東京高等工芸学校に受け継がれることとなる。

本科工業図案科の歴史15年，工業教員養成所工業図案科設置期間を含めても僅か17年という短期の存在ではあったが，東京高等工業学校図案科の工業日本近代デザイン史上に残した足跡は大きく，今日改めてその存在意義を問わなければならない。特に，工業図案科の創設期に教授陣容の中核をなし，工業図案科におけるデザイン教育の基盤を築くとともに，多くの有為の人材をデザイン界に送り出し，更には，当時の社会に対するデザインの啓蒙に力を尽した平山英三・井手馬太郎・小室信蔵についても，その経歴を通して，わが国近代デザザイン運動に果した役割を検証する必要があろう。

東京高等工業学校工業図案科とその教授陣容については，すでに別稿で概説したが，本年，上記教授陣中平山英三，および小室信蔵のご遺族の知遇を得，それぞれに貴重なご教授をいただくとともに，重要な資料を通覧させていただく機会を得た。何分にも資料点数が多く，全てにわたって整理する時機にはまだ至らないが，今回，小室信蔵の孫に当られる小室克介氏より，信蔵の自筆になる『編年体履歴書』を資料として提供いただくご好意を得た。

小室信蔵についても，すでに別稿で概説したが，彼の名をデザイン史の中で不動のものとしているのは，本邦におけるデザイン指導書の嚆矢ともいうべき，『一般図按法』の著者としての存在である。この本の初版が丸善より発行されたのは1909（明治42）年であるが，著者信蔵の没後の1924（大正13）年にもなお第10版が再版されており，この再版回数の多さは，小室信蔵の研究の成果が，長期にわたって有益視されたことの証左でもある。

最近刊行された田中一光氏の『デザインの周辺』の中に，「図案とデザイン」

と題する次の一文がある。

ぼくはそうした京都で青年時代を過したということに，最近ようやくその幸運を感じとれるようになった。といっても終戦直後のわずか四年間のことである。京都市立美術専門学校の文字通り図案科生である。一年生当時は，写生と便化に終始する。便化とはものの特徴を引き出しつつ強調し，単純な造形に置きかえる，いわば図案のデッサンである。これを徹底的にやらされる。

ここに要約されている「便化」という技法は，今日でも「デザイン化」という名のもとに，デザインの基礎学習の一分野としてよく行なわれるが，このスケッチにもとづくデザイン化の技法を方法論として欧米より導入し，「便化」としてデザイン教育に普及させたのが，小室信蔵である。

この例に限らず，信蔵が海外デザイン文献の導入と紹介に積極的であったことは，別表に掲げた彼の著述作品よりもうかがえる。またその著作点数の多さも，当時のデザイン教育者としては希有のもので，このことは，彼のあくなき探求心，真摯な研究態度をあらわすとともに，彼のデザイン教育・啓蒙に対する類いまれな情熱を示すものである。

以下本稿では，信蔵の『編年体履歴書』（以下『履歴書』と略称する）をもとに，彼が明治期において，わが国近代デザイン史の中に果した役割をさぐってみたい。なおこの『履歴書』には，信蔵の出生より世を去る前年の1921（大正10）年12月27日にかけての，主として彼の公務にかかわる出来事が，罫紙99ページにわたり几帳面な毛筆で書き込まれてあり，表紙裏には，「知ラレ易キ表面ノ歴史」とある。また，ページの欄外には，信蔵の４人の弟・１人の妹の動静も書き加えられており，父の没後家督を継いだ信蔵の，兄弟に対する長男としての細心の配慮の跡がうかがわれる。

この『履歴書』は，単に小室信蔵一個人の経歴を示すのみでなく，明治・大正にかけてのわが国近代デザインの推移を物語る，デザイン史の根本資料の一つ

に挙げられるべきものであろう。

(2)

秋田藩士小室秀俊(ひでとし)は，字を子傑，通称源吉，号を怡々斎(いいさい)といい，1837（天保8）年12月27日の生れ，秋田における狩野派の画家として，幕末・明治を通じ名を成している人物である。本姓は二葉氏，秋田藩士二葉代祐の三男に当るが，幼年，小室秀毅の養子としてその姓をついだ。祖父二葉膠山も文晁に就いて絵をよくし，秀俊も祖父の素養を受け継いだ。養父秀毅は，秀俊の天分を認めるにおよび,菅谷秀谷や津村洞養に就いて絵を学ばせた。『大人名辞典』によれば,小室怡々斎は，狩野派ではあるが容斎派の前賢古実などを研究し，人物・背景・調度などは必ずしも粉本に拘泥せず，研究の上これを画いたとある。

1884（明治17）年に開催された第2回内国絵画共進会には，秋田よりは小室秀俊をはじめ，津村洞養・寺崎広業ら15名の画家が出品者として名を連ねているが，このうち半数の7名が小室秀俊を師としており，秋田における秀俊の画家としての力量をしのばせている。

小室信蔵はこの秀俊の長男として，1870（明治3）年11月19日，羽後国（秋田県）秋田郡田町10番地に生れた。

1877（明治10）年には秋田師範学校附属小学校（当時は太平学校と称した）に入学，1884（明治17）年7月に同校小学高等科7年を卒業した。また，同年8月以降，信蔵は津村洞養および父秀俊について，狩野派の絵画を学び始めている。この時父より学んだ日本画の知識と技術は，のちに信蔵が欧米のデザイン関係の文献の飜訳と紹介に勉めた時，偏狭な欧米崇拝にかたむかず，折にふれて伝統的日本美術の豊富な実例や背景をなす歴史を引用しつつ欧米デザイン思潮の啓蒙と普及を計るという，信蔵独自の方法論の展開に役立つこととなった。

同じく1884（明治17）年の９月，信蔵は秋田中学に入学したが，１学年を終えた翌年の９月，「家事ノ都合ニヨリ」退学，以後日本画の研鑽をつむかたわら小松弘毅に就いて漢籍を，栖山楊武館に剣術・柔術を学んでいる。その後，1888（明治21）年に至り，３月から９月にかけて秋田簿記専修舎において，官用・銀行・商用の各簿記をも習得した。

1889（明治22）年４月，小室信蔵は秋田県尋常師範学校に入学する。この師範学校への入学は，信蔵の教育者としての第一歩をふみ出す契機をなすとともに，ここで身につけた語学力（英語）は，のちに信蔵が欧米のデザイン文献を渉猟するための力となった。また日本画においても頭角を現わし，在学中と卒業後に，秋田伝神会主催の絵画品評会に出品し褒賞を得ている。この秋田伝神会とは，郷土角館出身の日本画平福穂庵（平福百穂の父）死去の翌年1891（明治24）年に，穂庵の追善を目的として，京都の大家鈴木百年，東北出身の南画家菅原白竜を迎え開かれたもので，絵画品評会はその後も継続され，信蔵はその第１回と思われる1891（明治24）年に，「木村長門守図」により三等賞を，翌年は「孔雀」により一等賞を得ている。

1893（明治26）年３月師範学校を卒業，秋田県管内における小学校教員の資格を得た。これにより，同年４月より秋田市高等小学校の勤務についたが，４年後の1897（明治30）年７月，信蔵は新設された東京工業学校附属工業教員養成所工業図案科に，その第１期生として内地留学することとなり，以後本務の小学校は，休職扱いとなっている。

(3)

小室信蔵が東京高等工業学校に入学する1897(明治30）年までのわが国近代デザイン史の流れのうち，ウィーン万国博覧会への参同から金沢区工業学校の創立（1887〈明治20〉年）までについては，『デザイン理論』第12号（昭和48年12月）誌上で概説した。以後1900（明治33）年までのわが国のデザイン思潮は，

ウィーン万博参同者を中心に醸成された国粋主義的思想をバックボーンとして，日本伝統美術工芸を至上のものとする考え方が主流を占めていた。

一方産業界は，日清戦争の戦勝を機に，急速な発展と近代化の道を歩み始め，これに呼応した技術者の組織的養成が急務となる。このため工業教育を重点に，明治30年に前後して，「実業教育費国庫補助法」・「実業学校令」が制定され，実業教育機関の積極的充足が計られてゆく。明治時代のデザイン教育機関の設置が，明治30年前後に集中している所以である。

1894（明治27）年6月，「実業教育費国庫補助法」に附帯して発布された「工業教員養成規定」にもとづき，工業教員養成所が東京工業学校内に設置された。東京工業学校でのデザイン教育は，この養成所に1897（明治30）年設置された工業図案科に始まる。設置の主旨は当時の新鋭生産技術として脚光をあびつつあったロール捺染や陶磁器における転写技術に代表される大量生産機構に対応した「一型ヲ以テ多数品種ニ応用シ得ル技能ヲ有シ且ツ製造上ノ学理ヲ知悉シタル」デザイナーの養成，および染織・窯業などの地方産業に密着した実業学校のための図案科教員の養成にあった。

小室信蔵は，この新設の工業図案科へ，秋田県の県費留学生として入学することとなった。辞令交付は1897（明治30）年7月23日付，信蔵は27才であった。

進学の動機は，師範学校卒業後も勉学を継続するため上京したい希望を持ち続けていたこと，東京工業学校工業図案科の新設を知り，新しい科目に心をひかれたらしいことであり，東京美術学校を進学の対象としなかったのは，父秀俊の薫陶により，日本画の素養はすでに身につけていた為とのことである。(信蔵の妹，田坂常氏による)

開設当初工業図案科に課せられていた授業科目は，数学・物理学・化学・機械製図・授業法・工業経済・工業衛生・英語・体操のほか，専門科目として，図案材料・図画（用器画を含む）・実習があった。このうち図案材料は，その内容が更に図案法・工芸史大意・器物鑑識大意・古実有職大意・建築装飾大意

に分かれ，実習には，図案実習・図案特修（3年のみ）および図案をもとに実地に製作させるための金工・木工・漆工・陶磁器・染織工とその製作特修（3年のみ）が課せられていた。履習時間は3ヵ年を通じ実習が最も多く109時間，このうち図案実習が66時間を占めている。次いで絵画の57時間，図案材料の20時間で，これら3科目の授業時数は3年間の総授業時数249時間の72%を占めることになる。

図案関係教科の内容は，基本的には18世紀後期のヨーロッパにおけるデザイン教育の主流であった，伝統的様式学習とその再構成を踏襲している。例えば図案実習の内容は，『東京工業学校一覧』によれば，「其方法ハ各時代ノ図案様式ヲ臨画セシメ各工業品ノ標本ヲ真写シテ形状ノ組織模様ノ配置色彩ノ配合ヲ知ラシメ（中略）図案ヲ作ラシム」とある。

工業図案科の創設期に図案関係教科を担当していたのは，平山英三・前田健次郎・島田佳矣（よしなり）である。平山英三については，稿を改めて詳述しなければならないが，ウィーン万博の際随行の一員として渡欧，この博覧会参同の一大特色である技術伝習に際し，主にウィーン美術工業博物館附属美術工業学校において，長期にわたるデザインの研鑽（ウィーン万博の記録である『澳国博覧会参同記要』では，伝習の内容を「工作図学」としているが，実態としては「応用美術」の研鑽）にはげんだ。わが国における，海外教育機関によるデザイン研修者の嚆矢であり，石井研堂の『明治事物起原』にも，「洋式図案学習の始」として紹介されている。前田健次郎は1814（天保12）年江戸の生れ，古器古書画の鑑定に通じ，有職古実にも詳しく，1896（明治29）年より東京美術学校で，考古学及び図案の授業を嘱托されていた。島田佳矣は1870（明治3）年金沢の生れ，明治デザインの先覚者納富介次郎に影響を受け，金沢区工業学校美術工芸部に入学するが，1889（明治22）年東京美術学校絵画科に転学，日本画を学ぶかたわら独自に図案の研究をつんだ。卒業の1894（明治27）年東京工業学校に本科共通科目の図画担当の助教授として奉職，附属工業教員養成所は嘱托と

して指導に当っていた。

信蔵の経歴よりみて，父秀俊の指導により日本伝統美術への眼は充分に開かれており，有職古実についてもその知識を得ていた筈であるから，前田や島田の授業内容には，ある程度通じていたと思われる。指導教官中，信蔵が最も影響を受けたのは，平山英三であろう。信蔵は平山英三によって，海外への眼を開かれたと考えてよい。

在学中の信蔵については，信蔵と工業図案科の同期生で，信蔵の没後，その後任として愛知県立工業学校図案科長の職を継いだ中野喜平が，信蔵の訃報を伝える雑誌『現代之図案工芸』に寄せた「学生時代の小室君」と題する追悼文の中で，並外れた勤勉家であったと述べている。この真摯な研究態度は，工業図案科卒業後没年に至るまで持続されているが，後年デザインに関する幾多の著述が発表される基盤は，東京工業学校在学・在職中につちかわれたものである。

『履歴書』では，信蔵の工業図案科在学中の活動については，殆んど触れられていない。図案に関することとして，僅かに1899（明治32）年４月，「自作文房具四種一組ノ図案皇后陛下御用品トシテ用ヒラル」，同年12月，「自作図案懸賞ニ当リ博文館文芸倶楽部表紙ニ用ヒラル」とあるのみである。

(4)

小室信蔵が工業図案科を卒業する前年の1899（明治32）年９月，工業教員養成所に加えて本科にも工業図案科が設置された。科長は特許局と兼務で，工業教員養成所工業図案科以来の講師平山英三がその任に当り，兼務の科長の補佐として，イギリス帰りの新進デザイナー井手馬太郎を副科長に迎えた。小室信蔵は，卒業の年の一年間は師として，卒業後母校に奉職してからは職場の上司として井手と接することになるが，信蔵と井手馬太郎との邂逅は，井手のもたらした最新の欧米デザイン情報とともに，信蔵に鮮烈な刺激を与え，信蔵の目

を，デザイン先進国としてのイギリス・アメリカに向けさせる契機となった。井手は帰国に際し欧米のデザイン文献をたづさえ，授業の為の参考書としたが，信蔵はそれらの文献を，丸善を通し苦心して入手している。(田坂常氏による)

井手馬太郎は，1869（明治２）年12月20日，福岡県糸島郡周船寺村（現在の福岡市西区）に生れた。郷里にあっては，小学校の教員を二度程勤め，役所にも一時籍を置いたが，1889（明治22）年渡米，サンフランシスコのMark Hopkins Institute of Art（現在のSan-Francisco Art Institute）に美術を学んだ。1895（明治28）年にはヨーロッパに渡り，翌1896（明治29）年にロンドンのグリニチ敷物株式会社にデザイナーとしての職を得，ニュークロス美術学校（現在のロンドン大学 Goldsmiths' College）夜間部に入学デザインの研修にはげむかたわら，同年制定された農商務省海外実業練習生にも選ばれている。その第１期生である。

更に1897（明治30）年には，ロンドンで井手図案所を設立，翌1898（明治31）年ニュークロス美術学校を修了，同年ロンドンのSociety of Designers（1896〈明治29〉年設立）のPrivate Memberにもなった。1899（明治32）年５月の帰朝は，新設された東京工業学校本科工業図案科副科長就任のためとも考えられるが，上にみるような海外での，デザイン教育・実務に関する華々しい活動歴は，海外経験者の少なかった当時のわが国デザイン界にあっては，衆人の瞠目する所であったに違いない。小室信蔵が後に文部省海外留学生に選ばれた時（身体検査の結果留学は実現しなかった），その留学先をアメリカと定めていたことは，一つには井手の強い影響があったものと推定される。

井手馬太郎帰国の翌年，そして小室信蔵が工業図案科を卒業し，助教授として母校工業図案科に奉職することになった1900（明治33）年は，わが国のデザイン運動に大きな転機をもたらすパリ万国博覧会参同の年であった。1900年パリ万博では，日本伝統美術工芸品をもって，わが国が文化国家でありまた経済国としても競走力のあることを示す重要な要素と考え，従来に例をみない大々

的出品を行なったが，当地におけるわが国出品物の評価は散々なもので，伝統日本美術工芸上主義というウィーン万博以来の伝統を墨守したデザインに対しては，強く反省が求められ，改革を求める声がわき上る結果となった。ただ万博の会期は，４月15日より11月５日までであり，パリ博の反省をもとにしたデザイン改革運動は，翌年1901（明治34）年に持ち越された感がある。

小室信蔵のデザイン活動が活発化するのも，1901（明治34）年からである。まず，２月に「自作図按ヲ美術協会ニ出品」，日本美術協会より最優秀と認定され，褒賞の銀盃を得ている。続いて同月22日には日本美術協会の通常会員となり，以後自作図案の数々を協会に出品，多くの褒賞を得るとともに,1906（明治39）年には，協会主催の第39回美術展覧会における図按審査委員も委嘱されている。

デザイン界の動きとしては，パリ博の反省にともなうデザイン改良推進のための諸団体の結成が，1901（明治34）年に集中しており，陶画協会・日本図案会・大日本図案協会の名を挙げることが出来る。中でも，特に大日本図案協会は，東京工業学校工業図案科の出身者・関係教官を中心に，当時のプロフェッショナルなデザイナーを糾合した，わが国初のデザイナー団体であり，近代デザイン史上特筆すべき存在である。この協会は，付帯事業として機関誌『図按』を発行，新しいデザイン思潮の紹介を行なうなど，当時のデザイン界に多大の啓蒙的役割を果している。『図按』を通覧すれば，小室信蔵をはじめ井手馬太郎・鹿島英二（又仙の号を用いている）・森本十七八ら多くの東京工業学校工業図案科出身者が，執筆者に名を連ねているのが判るが，特に小室信蔵は，執筆回数の多さもさることながら，協会の幹事として会計あるいは編集者としての任にも当り，協会の維持運営に多大の力をなしている。この大日本図案協会での信蔵の数多い著述活動は，後の信蔵独自の方法論展開に，極めて有意義に働いていることは否めないが，『履歴書』には，協会における活動の記録は殆んど見当らない。

さて、1902（明治35）年は、信蔵にとって重要な年となった。この年の6月20日、農商務省より、工業図案科での同期生であり同僚でもある助教授森本十七八と共に、「清国ニ於ケル貿易品ノ意匠図案取調」方を委嘱され中国に関する知識を直接吸収する機会に恵まれることとなった。信蔵にとっては、生涯唯一の海外旅行となる。7月3日横浜より西京丸に乗船、9日上海着、以後杭州・蘇州を経て上海に戻り再び西京丸にて8月27日神戸着、東京帰着は29日である。この調査旅行の報告書は森本と共同執筆の予定であったが、森本は郷里（兵庫県）に帰着後間もない9月1日に、コレラに罹り急逝し，農商務省への報告は，一切信蔵の手にゆだねられることになった。この報告書は農商務省商工局より，『清国染織刺繍物ニ関スル意匠図按調査報告』として2年後の1904（明治37）年12月刊行されている。この中には，多くの織物を中心とした参考図が石版多色印刷で収録されているが，田坂常氏によれば，この原図を作成，報告書に添えて提出した際，織物の色といい柄といい本物と見まがうばかりで，その出来映えは農商務省当局を驚嘆せしめたとのことである。

(5)

1903（明治36）年は，信蔵の方法論の起点をなす「通俗図案法」発表の年である。この年は正月早々，後に海外留学を断念せざるを得ない原因となった肋膜炎を発病，こののちも幾度かこの病の再発に悩まされている。

「通俗図案法」は，『図按』の第18号より第21号まで連載され，7ページの図版と11ページの解説よりなる小文であるが，この「通俗図案法」こそ，そののち信蔵が著した一連のデザインに関する方法論の起点をなすものでありまた，わが国における方法論の嚆矢とも考えられる。小室は連載の第1回において，普通教育における図案教育が近年重視され始めたこと，および従来のデザイン指導が理念を説くことに終始し，方法論への視点が欠けていたことを指摘している。デザイン教育者としての鋭い視点であるが，信蔵に方法論の必要性を痛

感せしめたのは,『履歴書』に記載されているこの年の7月と9月に始まった学外での講習会活動であろう。この時はいづれも東京府北豊島郡教育会の嘱托により行なったもので，土曜・日曜の両日を用いて小学校図画教授法を講じている。その後信蔵の講演は，東京府外の他県からも要請を受けることになるが，こうした講習会活動が，そののち彼の「図案法講義」を生み，『一般図按法』へと結実する。

「通俗図案法」は，用器画法をもとにしたパターン作成法を説くもので，用具の説明より始まる。次いでその運用による多角形・円・楕円の作図法，円と多角形の結合について述べ，それぞれのパターンとしての応用を，日本の伝統模様により図版で示したものである。この手順は，J. Wardの "The Principles of Ornament" にヒントを得たのではないかと考えられるが，この点については別稿で概説したので，ここでは「通俗図案法」が方法論を展開した点でユニークであるとともに，外国文献との関連が認められる点を指摘するにとどめる。信蔵の外国文献の紹介はこれ以後活発となる。主としてイギリスで発刊されたものの紹介が多い点，井手馬太郎の示唆を考えぬ訳にはゆかない。この頃すでに，信蔵の外国文献渉渉と読破が始められている。例えば『図按』第26号・第29号には，「支那の装飾模様」が紹介されているが，これはOwen Jonesの "Examples of Chinese ornament selected from objects in the South Kensington Museum and other collections" (London, 1867) の抄訳で，中国での信蔵の見聞が，Owen Jonesの記述を親しみ易いものとしたことによるのであろう。このほか外国関係資料の紹介としては，『図按』第34号・第35号に「英人の眼に映ぜる日本図案」を連載している。これは，ポール・エス・ハスルックの『デコラティブ・デザイン』の抄訳とのことであるが，原著に関する詳細は不明である。

1906（明治39）年は，東京高等工業学校工業図案科にとって波乱の年であった。教員スタッフの大巾な人事移動が行なわれている。すなわち，副科長の井

手馬太郎と横井時冬・荒木寛畝が退職し，平山英三は講師としてはとどまったものの科長の職は辞している。以後副科長も置かれていない。在籍教官中半数の移動で，のちに留任者5名中本科工業図案科設置時からの平山英三とともに，小室信蔵が揃って退職しているところをみると,単に人事の新旧交替では説明のつかない複雑な事情が，その背後にかくされていたと考えざるを得ない。信蔵が『履歴書』の表紙裏に，「知ラレ易キ表面ノ歴史」と断りを入れたのは，この間の事情がからんでいるのではなかろうか。

大日本図案協会の活動が，前年の1905（明治38）年末頃より低下し，機関誌の発行もこの年には途絶え勝ちとなり，遂には第36号（明治39年2月）をもって停止していることは，この大巾な人事移動と無関係とは思えない。

こうした変動の時期にあって，信蔵は彼の方法論を更に発展させる推進力となった東京府教育会主催の図案講習会講師を委嘱される。内容は，工業補習学校普通科教員講習会において，工業に関する図案の講話を行うことで，普通教育と異なり,講話の内容に,より専門的知識・技術を盛り込む必要があったと考えられる。開講は1905（明治8）年11月11日，以後12月まで継続された。

続いて1906（明治39）年9月7日にも，再び教育会の委託を受け，「図按講義」を毎週土曜日午後3時間宛,本所東京職工学校にて行なった。講演は11月17日10回をもって完了したが，1906（明治39）年8月21日発行の『工芸講義録』第8号に収められている信蔵の「図案法講義」は前年の講習会の内容に加筆，整理を加え，上に述べたこの年の講習会のために，準備されたものと筆者は推定している。

その緒論に，「二三種の西洋種を種としてなるべくは日本の例をもって順次に説明しやうと思ふ。」とあるが，基本的には F. G. Jackson の“Lessons on Decorative Design”（London, 1900）を底本としていることは，目次の比較よりみても明らかである。この点についても別稿で述べたが，目次における，Linear Ornament を「白描法」,Brush Work を「没骨描法」としたところなどは，

父秀俊より日本画の薫陶を受けた信蔵の面目躍如たるものがある。この「図案法講義」が方法論として画期的であったのは，前述の「通俗図案法」に比べて格段に内容が豊か（全170ページ）であることもさることながら，自然物のスケッチと観察をもとにしたデザイン化を通じて，新しいパターンを生み出す為の「便化」と名づけられた方法論を導入した点にある。この「便化」が，名前こそ忘れられつつあるものの，今日なおデザインの基礎トレーニングの一環として行なわれることのあることは序論で述べた。

「便化」の語源である Conventional あるいは Conventionalization は，もともと Ornament の世界での用語で，「様式化」あるいは Ornanent における realistic に対置する概念である。従って「便化」が今日のデザインの基礎トレーニングとは完全に同一ではない。

信蔵は初めこの Conventional を「硬化」と訳していたふしがある。先述の『図按』第26号（明治37年５月）「支那の装飾模様」において，「模様構成に関し硬化さる資料」・「清国が硬化したる模様的形状」あるいは「硬化を処理する技術」として，たびたび「硬化」の文字を用いている。「便化」は同じく『図按』第34号（明治38年８月）の「英人の眼に映ぜる日本の図案」で，「純粋なる便化の正鵠を得る正当の手段」として初めて登場する。英語の Conventional は，当時の辞書をもってしても，「硬化」，「便化」という訳語には結びつきにくい。恐らくは，抽象化された形態が，写実に対して幾分の「硬」い印象をもつことにより「硬化」の訳が生れ，これが Conventional の言葉のひびきと，文字としての「硬」と「便」の類似性により「便化」に落ちついたものとも考えられる。これは，Conventional の訳者を小室信蔵とした筆者の推論であるが，中村達太郎の『日本建築辞彙』（初版明治39年６月，筆者が参照したのは明治41年４月の第４版）に，「天然物ニ人意ヲ加ヘテ正整ナル形ニナスコト」と便化の説明がなされており，建築装飾の世界では，早くからこの訳語が用いられていたとも考えられる。またのちの『一般図按法』の基本的構想が，

この「図案法講義」にあったことは，目次にみえる方法論展開の手順が殆んど同じであることによっても明らかである。

1907（明治40）年，信蔵は東京府より，東京勧業博覧会審査補助を委嘱されているが，この博覧会は，東京高等工業学校図案科において試みられていた信蔵のデザイン教育の方法がそれまでの発表の機会であった特定教員を対称とする講習の枠を超えて，一般に公開され衆知される場を提供することとなった。この博覧会に参画した東京高等工業学校工業図案科は，信蔵の教授法を「図案教授法順序」として展示したが，デザイン教育に対する関心の高まりつつあった当時にあって質問を受けることが多く，これを『おだまき』のタイトルで一冊の本にまとめ，大日本図案協会の編により刊行することとなった。

『おだまき』は，図案教授の順序として，「図案法講義」を簡略化した実物看取・便化創案・独立適合・二方連続・散点連続・形状区画・装飾の8項目をとりあげ，それぞれに色刷りの図を添えて解説がなされているが，この書は山形寛氏によれば，「図案教授の夜明を告げるような意味をもつもの」となった。

1907（明治40）年はまた，信蔵が文部省の海外留学生に推挙されながら，身体検査の結果不合格となった時期ではないかと思われる。この件については，『履歴書』にも触れられていないので時期を特定するのはむつかしいが，『松岡寿先生』の中に，松岡が平山英三のあとを継いで工業図案科長として就任後，工業図案科よりも海外留学生を送り出そうと小室信蔵を当局に推したが，身体検査の結果不合格となったので，代りに信蔵の2年後輩で当時信蔵と同じく助教授であった安田禄造がオーストリアに赴くことになったとある。松岡の科長就任は1906（明治39）年9月15日であるから，留学の一件はこれより後になる。

信蔵は留学地をアメリカと定めていた。これには第1に英語に秀でていたので，英語圏を留学地の対象としたこと，第2に井手馬太郎よりアメリカ・イギリスの情況について，詳しい情報を得ていたこと，第3に，外国文献の研究の中からアメリカの研究者 Denman W. Ross や E. A. Batchelder らの著作に

接し，デザイン理論究考の地をアメリカに定めたことなどが，留学地選定の理由として考えられる。アメリカ留学のため，映画をみる場合にも，映像を通じてアメリカの風俗・習慣を身つける努力をおこたらなかったといわれる。

健康診断の結果，留学不可との裁定がもたらされた時の信蔵の無念さは一通りではなかった。一旦は失意の極にあったものの，信蔵は日本にあって留学生に劣らぬ研究成果を挙げんものとの固い決意のもとに，以後海外文献の研究に一段と力を入れ，一層研究生活に専身するようになった。「以来，家に帰っても，まっすぐ机に向ってすわりましたので，当時子供であった私まで，あによめであった義姉に何か気の毒な気がしました。」と田坂常氏は当時の信蔵を回想されている。

この逆境がかえって信蔵を奮起させ，以後数多くの著作を著わすことによって研究の成果を世に問うことにつながって行く。その最初の成果として上梓されたのが『一般図按法』である。

『一般図按法』の初版は，1909（明治42）年3月5日に発行されている。その自序のしめくくりに，「明治41年11月上旬，谷中の僑居に於て」とあるので，脱稿もこの頃であろう。基本的構想は先述の通り「図案法講義」によっているが，『一般図案法』は約400ページ，図版198点を含む詳細なデザイン指導書で，これをもって信蔵の方法論に一区切をつけている。内容・表現ともに「図案法講義」に比べて一段と格調が高く，準備と原稿作成には1年余の才月が費されたのではあるまいか。また，『一般図按法』の例言において示された関係原書は次の通りであるが，最も新しい版で1906（明治39）年となっていることも，原稿着手を1907（明治40）年頃，すなわち留学の不首尾もこの年と推定させる理由の一つである。

C. Armstrong — Cusack's Freehand Ornament ……

W. Crane — The Bases of Design …… 1902（1898）

W. Crane — Line and Form …… 1904（1900）

L. F. Day — Pattern Design ……1903 (1903)

C. Dresser — Principles of Decorative Design …… (1873)

F. G. Jackson — A. B. C of Drawing and Design …… (1900)

F. G. Jackson — Lessons on Decorative Design ……1900 (1888)

F. G. Jackson — Theory and Practice of Design ……1894 (1894)

Elementary Design……

H. Cadness- Decorative Brush Work and ……

H. Mayeu — A Manual of Decorative Compositi on ……

C. Martel — Principles of Ornamental Forms ……

J. Ward — The Principles of Ornament ……1896 (1892)

J. Ward — Progressive Design for Student …… 1902 (1902)

Batchelder — The Principles of Design ……1904

Rhead — The Principles of Design …… 1905 (1905)

A. Bluck — Die Formenlehre ……1906

筆者注　(　)内には判る範囲，初版年を入れた。

これらは、信蔵が読破した洋書の一部に過ぎないであろう。『一般図按法』発刊の年の１月、信蔵は愛知県立工業学校へ転出の為、居を名古屋に移しているが、転居の際書物丈でも1700余冊、荷車一台分を占めたと信蔵の日記『金城僑居日録』に記されている。信蔵の蔵書は、信蔵の没後、工業図案科の同期生中野喜平によって整理され、まとめて郷里の母校秋田師範に寄贈されたが惜しくも戦火によって失なわれたという。

『一般図按法』については、内容紹介は略するが、特色として挙げられるのは、美的形式原理としての造形用語を系統だてて紹介した点である。この点についても別稿で概説した。

『一般図按法』は非常な好評をもって迎えられた。初版刊行の４ヵ月後には訂正再版が発行され、1921(大正10)年には第８版が、そして信蔵の没後の1924

（大正13）年においてすら、第10版が刊行されており、わが国における方論のプロトタイプとして，その後のデザイン指導に長く影響を与え続けている。彼の紹介した構成原理・「便化」の方法・パターンの展開法をとり入れたデザイン指導書の例は，枚挙にいとまがない。

(6)

『一般図按法』刊行の前年の1908(明治41)年11月，信蔵は東京高等工業学校より愛知県立工業学校へと転任の命を受けた。　県立工業学校図案科長福井江亭が東京美術学校へ転出するあとを受けて，図案科長就任の為である。ちなみに，福井江亭の前任者は川崎千虎であった。中央において，ようやく研究の成果が刊行となり，声望を得る直前の出来事丈に，この転出は彼にとって喜ばしいものであったとは思えない。移動の理由は明らかでないが，信蔵の力量と人事移動内容とのアンバランスは世人にも奇異に感ぜられたのか，雑誌『現代之図案工芸』第48号の「図案工芸界月旦福井江亭と小室信蔵」において「(彼の勤勉さと雄弁という）特色のために平俗なお座なりの東京の図案界から躱よくおくり出された気味がある」と評されている。受け入れ側の愛知県立工業学校長柴田才一郎すら，同じく雑誌『現代之図案工芸』第８巻第３号の小室信蔵追懐談において，「その学識は一県立の工業学校教諭としては実に勿体ないもので，自分はこの点同君に対して常に甚だお気の毒に思っていた」と述べていることからして，月旦の評もあながち根拠のないこととは言い切れないものがある。

信蔵は，この名古屋を拠点としてその後も著述活動を続け，没年の 1922(大正11）年２月９日　までこの地を動くことはなかった。名古屋において，本科工業図案科第１期生深田藤三郎との親交を得たことは，信蔵の著述活動にとってこの上ない力となった。深田藤三郎の主宰する深田図案研究所より，信蔵の著作が多く刊行されていることはその一つの現れである。

『一般図按法』発刊の２年後の1911（明治44）年２月，信蔵は本科工業図案科明治39年卒の宮本忠平との共著『日本家具図按と製作法』を発表した。『履

歴書』においては，この刊行を1912（明治45）年としているが，第1版の奥付は印刷・発行とも明治44年となっており，45年は信蔵の誤記と思われる。『日本家具図按と製作法』は，明治期に出版された家具関係の書物としては3・4番目に古いが，相前後して出版されている家具関係の書物に比べて，家具の製作法が紹介されていること，家具のサンプル図版数が群を抜いて多いことなどを特徴としている。

明治期の棹尾を飾る信蔵の著作は，『稿本図按用語図解』（非売品）で，明治が大正と改まる前月の11月に完成している。残念ながら未見でありその内容を知らない。

なおデザインの作品では，今日なお信蔵の息吹を伝えているものがある。戦前・戦後を通じてわれわれに名染みの深い森永乳業のエンゼルマークがそれである。

名古屋における小室信蔵は著述活動にとどまらず，愛知県を初め，京都・新潟など各地のデザイン振興事業に参画し，デザインの発展に力をなしている。『履歴書』には，その活動の記録も細かく記されているが，名古屋時代の大半は大正期に属するので，紙幅の都合上この期間については他日を期したい。大正期の信蔵についての論考が進まぬ理由は他にもある。

1914（大正3）年の工業図案科の廃止は東京美術学校との合併案を含み，製版などの部門は一時美術学校内に新設されている。廃止決定時の工業図案科生75名（選科・附属工業教員養成所を含む）の教務は，その卒業まで美術学校に預けられているが，信蔵はこの合併の反対と廃止徹回の陳情に，深田藤三郎と共に上京している。『松岡寿先生』によれば，松岡が工業図案科廃止の件を当時の東京高等工業学校長手島精一より突然申し渡されたのは7月21日となっている。信蔵の上京は7月23日と記されており，その行動の素早さには驚く外はない。陳情の結果が不首尾であったことはその後の経過が示す通りであるが，この件を含めた東京高等工業学校図案科関係者の動静は，深田藤三郎により1914（大

正３）年２月15日創刊された雑誌『現代の図案』（のちに『現代之図案工芸』，『図案と工芸』にそれぞれ改題）に記載があると思われる。残念ながら管見の範囲では，第41号以降が国会図書館に収蔵されているが，創刊後第40号（大正６年９月）までの分は今の所見当らない。別表にみるように，信蔵はこの雑誌にも数多く執筆しているので，特に1917（大正６）年までの信蔵の活動を知る上で『現代の図案』は不可欠であるが，これを欠く現状では，大正期の信蔵についての論考を進めるに至らないのが実情である。

以上，小室信蔵の自筆になる『編年体履歴書』をもとに，彼の明治期における活動を概説してみた。『履歴書』には公的活動の記録の他，信蔵の結婚・子供の誕生・家族との離別など，私生活における様々な出来事についても記載されている。これらの点も信蔵の実像を浮び上らせる重要な視点であろうが，今回はこれをはぶかせていただいた。多くのご批判とご指導をお願いする次第である。

本稿作成に当り，信蔵の孫に当られる小室克介氏・信蔵の妹田坂常氏・信蔵の長女宮崎尚子氏より貴重な資料の提示をいただき多くのご教授を得た。また，京都教育大学の日野永一先生からも多くの助言と資料の提供をいただいた。この場をかりて厚く御礼申しあげます。

参考文献

① 東京高等工業学校編　『東京高等工業学校25年史』　明治39　同校
② 磯崎康彦・吉田千鶴子　『東京美術学校の歴史』　昭和52　日本文教出版株式会社
③ 秋田魁新報社編　『秋田人名大辞典』　昭和49　秋田魁新報社
④ 下中孫三郎編　『大人名辞典』　昭和32　平凡社
⑤ 村松梢風　『本朝画人伝』巻六・巻七　昭和52　中央公論社
⑥ 『第二回（内国絵画共進会）出品人略譜』　明治17

⑦ 浦崎永錫 『日本近代美術発達史』（明治編） 昭和49 東京美術

⑧ 田中芳男・平山成信編 『澳国博覧会参同記要』 明治30

⑨ 文部省実業学務局編 『実業教育50年史』 大正9 実業教育50周年記念会

⑩ 『東京工業学校一覧』 明治30年～明治45年

⑪ 明治45年 石井研堂 『改訂増補明治事物起原』上巻 昭和19 春陽堂

⑫ 『審査官列伝』 明治36 金港堂

⑬ 大植四郎 『明治過去帳』 昭和46 東京美術

⑭ 『1900年巴里万国博覧会・臨時博覧会事務局報告』上 明治35 農商務省

⑮ 上野直昭編 『明治文化史』8 美術編 昭和31 洋々社

⑯ J. Ward *The Plinciples of Ornament* 4th ed. London, 1899

⑰ F. G. Jackson *Lessons on Decorative Desing* London, 1900

⑱ 高安亀次郎 『東京勧業博覧会記念宝典 産業工芸審査全書』 明治41 興道館本部

⑲ 山形寛 『日本美術教育史』 昭和42 黎明書房

⑳ 東京高等工芸学校同窓会編 『松岡寿先生』 昭和16 松岡寿先生伝記編纂会

㉑ Denman W. Ross *A Theory of Pure Design* Boston and New York, 1907

㉒ E. A. Batchelder *The Principles of Design* Chicago, 1906

㉓ 『愛工五十年史』昭和30 愛工五十周年記念会

㉔ 雑誌『図按』 創刊明治34～

㉕ 雑誌『現代の図案』 創刊大正3年～

㉖ 緒方康二「明治とデザイン—ウィーン万国博覧会から金沢区工業学校の創設まで—」『デザイン理論』第12号 1973年12月 関西意匠学会

㉗ 緒方康二 「明治とデザイン—東京高等工業学校工業図案科を中心に—」『夙川学院短期大学研究紀要』第2号 1978年6月

㉘ 緒方康二 「明治とデザイン—大日本図案協会と雑誌『図按』—」『夙川学院短期大学研究紀要』第3号 1978年12月

㉙ 緒方康二 「明治とデザイン—小室信蔵の方法論—」『夙川学院短期大学研究紀要』第4号 1979年6月

この他，小室信蔵自身の著作分については，別表を参照されたい。

2. 単行本

No	タイトル	発行所	発行年月日	備考
1	「図案法講義」 (『工芸講義録』第8号所収)		M39. 8. 25	
2	『おだまき』	芸艸堂	M40. 7. 8	
3	『一般図按法』	丸善	M42. 3. 5	
4	『日本家具図按と製作法』	〃 〃	M44. 2. 1	宮本忠平との共著
5	『稿本図案要語図解』		M45. 11.	非売品
7	『稿本図案学精義』	深田図案研究所	T 2. 12. 5	Denman W.Ross *A Theory of Pure Design* Boston and New York, 1907の訳。 愛知郡教育協会の講習のため準備されたもの。
7	『図案若菜集』	〃 〃	T 4. 4. 22	深沢宮次郎との共著
8	『実用配色法』	〃 〃	T 7. 1. 20	J. Ward *Colour Harmony and Contrast* London: Chapman and Hall, 1903の訳
9	『形象芸術の要諦』	丸善	T 8. 1. 28	Claude Bragdon *The Beautitul Necessity* New York, 1910の訳。
10	『図案の意匠資料』	〃 〃	T10. 12. 25	

1．雑誌関係

小室信蔵著作リスト（1980.8.31作成）

No	タイトル	発表機関	発行年月日	備考
1	友禅の年代姓名に就きて	『図按』第２号	M35．２．25	14～18P
2	既来品より図按研究	〃 第11号	M36．２．10	５～８P
3	通俗図案法	〃 第18号	M36．９．10	27～31P
4	〃（承前）	〃 第19号	M36．10．10	35～37P
5	（通俗図案法用図版２葉）	〃 第20号	M36．11．10	
6	通俗図案法（其三）	〃 第21号	M36．12．10	28～31P
7	知者と能者	〃 〃	〃 〃	３～６P
8	清韓貿易業の諸君に告く	〃 第24号	M37．３．25	７～10P
9	支那の装飾模様	〃 第26号	M37．５．25	１～５P
10	〃（続）	〃 第29号	M37．８．25	14～17P
11	北斎の企画し自ら監督工作せる山車	〃 第30号	M37．９．25	８～10P
12	図案の発展すべき余地は主として新工芸にあるか	〃 第33号	M38．１．25	５～７P
13	英人の眼に映ぜる日本の図案	〃 第34号	M38．８．５	１～５P
14	〃 〃（続）	〃 第35号	M39．10．５	12～16P
15	支那装飾模様	〃 第36号	M39．２．３	18～20P
16	散点模様の単位の方向を簡単に確定し得る便法	〃 〃	〃〃 〃	22～23P

17	図画教育の主義に就きて	『愛知教育雑誌』275号	M43．7．20	1～4P
18	郷土芸術漫言	『現代之図案工芸』第41号	T6．10．1	17～22P
19	図案源流雑纂	〃 第42号	T6．11．1	25～26P
20	閣龍の墳墓	〃 第43号	T6．12．1	51～53P
21	国旗と桜色と紅白の幕	〃 第44号	T7．1．1	2～6P
22	文部や農商務の御方々にもご一考を願いたい	〃 第46号	T7．3．1	27～36P
23	新たに図案工芸の学校に入学したる学生に対する余の希望	〃 第48号	T7．5．1	7～8P
24	手工科視察所感の一二	『愛知教育雑誌』367号	T7．6．30	4～7P
25	図案源流雑纂(講義)	〃 第54号	T7．11．1	
26	〃 〃	『現代立図案工芸』第55号	T7．12．1	
27	定光寺の装飾	〃 第56号	T8．1．1	7～9P
28	図案源流雑纂(講義)	〃 第57号	T8．2．1	
29	〃 〃	〃 第58号	T8．3．1	
30	図案の絶対的権威	〃 第76号	T9．9．1	7～9P
31	公立学校芸術科に於ける生徒能力に関する実験	『現代之図案工芸』第79号	T9．12．1	6～12P
32	〃 〃	〃 第80号	T10．1 1	8～9P
33	埃及の配色装飾に就いて	『図案と工芸』7月号	T13．7．1	20～22P